

ご挨拶

永宮 正治 (ながみや しょうじ)

本日、私の祖父にあたります佐々木吉三郎によります柔道指南書刊行百年を記念してこのように盛大な佐々木杯トーナメントが開催されましたことは、私共佐々木ファミリーの者にとって大変光栄であり、また栄誉なことでもあります。佐々木ファミリーを代表して、ご参集の皆様方に、まずはお礼を申し上げます。

百年前の日本は今日の日本とはまったく異なっておりました。長い鎖国のあと、日本が本格的に開国をしたのは明治の始まりである約 140 年前のことでした。私が住んでおります町は、日本で大きな会社として知られる「日立製作所」のある町のそばにあります。この会社は、約百年前の 1906 年に創立されました。当初は米国で作られた電動モーターの修理工場としてスタートしました。当時の日本における先端的な製品のほとんどは、ヨーロッパとアメリカからの輸入品でありました。

そのような時代に、柔道が日本からヨーロッパに輸出されたのです。私はこの点に非常に興味を抱きました。理由は、百年前の時代は日本から先進国ヨーロッパに輸出するものなど皆目なかった時代であったからであります。歴史を紐解きますと、この決定をしたのは当時のハンガリーの貴族で、外交官を経て国会議員にもなられた Szemere Miklós 氏でありました。氏は、日露戦争に 1905 年日本が勝ったその日本の活力の秘密は何なのかを考え、その秘密は柔道にあるのではないかと推測したと伝えられています。

同氏の招待状は、早速講道館に届き、私の祖父がハンガリーでの柔道指南の役を担うことになりました。祖父は多くの畳や必要な道具を船に持ち込み、ブダペストに 1906 年 3 月に到着いたしました。しかしながら、ハンガリーで柔道を教えることになって間もなく、祖父は教科書が必要なことを痛感いたしました。そこで、Speidl Zoltán 氏の助けを借りて柔道指南書を、今からちょうど百年前の 1907 年に書き上げた訳です。

ここで、この本をめぐるエピソードを二つご紹介させていただきたいと思います。第一のエピソードは、ドイツの皇太子が佐々木吉三郎氏から柔道の個人レッスンを受けたことです。これはブダベスト滞在の後のことです。この本がドイツ語に翻訳されたためだと思われます。その後、皇太子殿下は柔道の大ファンになりました。そして、皇太子一行がアジア訪問の旅に出ることが決まったとき、皇太子殿下は日本に帰国していた佐々木氏の家数週間滞在したいと申し出ました。このニュースを聞いた佐々木氏は驚天動地のように驚き、全財産をはたいて文京区原町に新居を建て、皇太子殿下の来訪を待ちました。ところが、一行の船がインド付近に到着した頃、第一次世界大戦が勃発いたしました。一行の船は、やむなくドイツに引き返さざるをえなくなり、皇太子殿下の佐々木氏新居での滞在もなくなってしまったそうです。

第二のエピソードはごく最近のことです。本年6月に私はある科学関連の国際会議を東京で開催し、天皇皇后両陛下を開会式にお招きしました。その折、私の友人の Csörgő Tamás さんが、今回の主催者でおられる Ozsvár András さんから天皇陛下宛への手紙を携えてこられました。この手紙には、本日のこの催しのごことが書かれていたようです。そこで私は、知り合いの侍従の方を通して、このお手紙と佐々木吉三郎氏の本を天皇にお渡ししていただけないかとお願いいたしました。その後、驚いたことに、天皇から本日の催しと佐々木氏の本の両方に対し、深い謝意が述べられてきました。私の祖父は、この本が百年後に日本の天皇陛下によって読まれることなどは想像していなかったことと思います。また、色んな偶然が重なってこういう結果を生じたことに対し、私も驚いております。

この本は、2年前にブダベストにおいて多くの友人のサポートを得て発見されました。特に、ハンガリー科学アカデミー会員の Zimányi József 教授、その奥さんでコンピューターに詳しい Zimányi Magdolna さん、ハンガリー国立 Széchényi 図書館で本の電子化をリードされている Moldován István さんには、殊の外お世話になりました。また、Csörgő Tamás 教授にも何から何までお世話になりました。非常に悲しいことに、私の仕事上でも私生活上でも最大の友人の一人であった Zimányi 教授は最近お亡くなりになりました。教授の大きな助けがなかったらこの本は見つからなかったと思います。ご冥福をお祈りさせて

いただきます。

話は佐々木吉三郎杯に戻しますが、本企画に精魂込めて働いて下さった **Ozsvár András** 氏にまずは感謝させていただきます。同氏の熱意がなければ、本日のイベントは実現しなかったと思います。また、**Ozsvár** 氏は、彼の柔道道場を「**Sasaki Kichisaburo Judo Klub** (佐々木吉三郎柔道倶楽部)」と命名することを決められました。このことに対しても、私共佐々木ファミリーは、感謝の念を禁じ得ません。

本日のイベントの最も重要な側面は、これを機に今後、ハンガリーと日本の文化交流をより強力に促進することにあると思います。今回を機に、私も多くの日本の柔道家とも知り合うことが出来ました。全日本柔道連盟にもお世話になり、深く感謝しております。私の心からの願いは、これを機に、柔道のみならず、本日この会場で見ることにも出来ましたあらゆる文化的な側面において、両国の相互交流が顕著に加速されることができればという点でございます。

最後に、会場にお集まりの皆さま、この会を支えて下さった皆さま、そして来賓の皆さま、本当に有り難うございました。